

# 国境の街で見た ウクライナ難民の苦悩と欧州の選択

ある者は脱出し、ある者は残り、ある者は戻る。  
ロシアによる軍事侵攻の直後から、  
ウクライナと国境を接する欧州諸国は難民の受け入れを始めた。  
市井の人々が直面する苦悩と、迎える欧州諸国の  
対応を現地からリポートする。



ポーランドに入国し、ポーランドから提供された食事を取るウクライナの避難民。2月25日ポーランド南東部メディカで（三木幸治撮影）

毎日新聞前ウイーン特派員  
**三木幸治**

みき こうじ 二〇〇二年毎日新聞社入社。水戸支局、東京社会部、中部報道センターなどに勤務後、一六、二〇年ウイーン特派員、二二年よりエルサレム特派員。今般のウクライナ情勢を受けて、二月下旬～三月中旬にウクライナ国境に近いポーランドの複数の街で取材を行った。

第二次大戦後、欧州で最大の人道危機と呼ばれるロシア・ウクライナ戦争。欧州連合（EU）は、ウクライナからの避難民が今後、「最大七〇〇万人以上」になると推測する。

筆者はロシアの侵攻が始まった翌日の二月二五日、避難民が殺到するポーランド国境周辺に入った。避難民の視点から、今回の戦争を考えてみたい。

## 引き裂かれる家族

ウクライナはポーランド、ハンガリー、ルーマニアなどの国々と国境を接するが、そのうち最も多くの避難民が集まるのがポーランドだ。ポーランドとウクライナは歴史上、密接な関わりを持ってきた。第二次大戦後には、当時のポーランド東部が旧ソ連（現ウクライナ）に編入されている。二〇〇四年にポーランドがEUに加盟すると、ウクライナからの出稼ぎ者が増えた。現在、ポーランドに住むウクライナ人は約一五〇万人。言語も近く、ポーランド人は一般的にウクライナ語を半分以上理解できるといふ。

筆者が二五日夜、国境のメディアカ検問所付近に着くと、ボランティアが簡易休憩所を作り、避難民にスूपやパンを提供していた。だが、ここの光景は少し異様だった。以前ギリシヤで難民取材をしたことがあるが、その時と決定的に違うのは、避難民が女性と子どもだけだったことだ。ウクライナ政府は二月二四日に戒厳令を発令。戦闘への参加を促すため、一八〜六〇歳の男性を出国禁止にしていた。またロシアと戦うため、自発的に母国に残った男性も多かった。

凍えるような寒さのなか、疲れ切った様子でベンチに

座っていたナタリア・アンブレイキナさん（50）と娘のソフィアさん（14）が話を聞かせてくれた。

ナタリアさんが住んでいたのは、西部イバノフランクフスク。二四日、自宅近くの空港にミサイルが着弾し、火の手が上がった。「本当に戦争が始まった。逃げましょう」。ナタリアさんは、急いで荷物をまとめながら、夫のイゴールさん（50）をせかした。だがイゴールさんは同意しなかった。「私はこの街を最後まで守る。子どもを連れて逃げてくれないか」。イゴールさんは数日前、志願して軍に入隊していた。

イゴールさんは国境沿いのシェヒニに二人を車で送ってくれた。だが国境が近づくにつれ、道はひどく渋滞し、多くの人々が車を降りて歩いていた。二人が車を降りると、イゴールさんは「どうか元気でいてほしい」と言い残し、故郷に続く道を引き返した。ナタリアさんらは、国境まで約二〇キロの道のりを六時間かけて歩き、二五日午後によりやく国境を越えた。これから友人が住む南部クラクフに滞在した後、別の友人が住むドイツに向かうという。

筆者は「今後、祖国に戻るつもりはありますか」と聞いてみた。ナタリアさんは首を振り、「もしロシアが占領したらあらゆる自由が奪われる。ウクライナは全く違う国に

なってしまうでしょう」と話した。そして、続けた。「戦闘で生き残ったとしても、占領後に夫はきつと拘束される。次はいつ会えるのかしら」。ナタリアさんの目から涙があふれた。

夫を残して国境を越えたナタリアさんとは異なる決断をする人もいた。西部テルノピリ出身のアンナ・ルトシユシンさん(62)だ。一度ポーランドに越境したものの、再び夫(63)がいる祖国に戻ることにしたという。

戦争が始まると、娘はアンナさんと夫に「友人が住むスウェーデンに逃げよう」と訴えた。だが、夫は「生まれ育った国に残りたい」と主張し、出国を嫌がったという。アンナさんと娘は車と徒歩で国境を越えた。だが、アンナさんは健康状態の良くない夫のことが頭から離れなかった。悩んだ末、娘と離れて戻る決心をした。「戦争は怖い。だけど、私たちはもう年だし、最後は夫婦で一緒にいたいよ」。アンナさんは、筆者にそう言って笑ってみせた。

戒厳令に引き離された家族もあった。バレンティナ・プロトセンコさん(35)は、二四日早朝に侵攻が始まると、西部リビウから夫(34)、息子(7)とともに車でポーランド国境のシェヒニを目指した。だが、ウクライナ当局は国境近くで、夫に車でリビウに戻るように命じた。バレン

ティナさんは歩いて国境を越えたが、ポーランドに頼れる人は誰もいない。今後の予定は白紙だという。

## シリア難民とは全く異なる欧州の対応

戦争に引き裂かれる家族は、驚異的なペースで増え続けている。ロシアが攻撃対象を全土に広げ、戦争が長期化しているからだ。国連によると、国外に脱出した避難民は、三月一六日時点で三〇〇万人を超えた。国別では、ポーランド約一八三万人▽ルーマニア約四六六万人▽モルドバ約三四万人▽ハンガリー約二七万人、となっている。

一方、避難民を受け入れる欧州側の対応は素早かった。EUは三月三日、ウクライナからの避難者に、ビザなしで長期間の滞在を認める「一時保護措置」を適用することに合意した。この措置は大勢の難民への対応で混乱した旧ユーゴスラビア紛争時の教訓から設けられたが、適用は初めてだ。ウクライナ人避難民にはEUに一年の滞在許可が与えられ、状況に応じて更新できる。滞在期間中は、雇用や医療、教育などの支援が受けられる。

欧州では二〇一五年、シリア内戦などの影響で中東、アフリカ諸国から一〇〇万人以上の難民らが押し寄せた。この時、ハンガリー、ポーランドなどの東欧諸国は国境に壁



避難民に支援を申し出るポーランド人のマルティン・ベンダさん。2月26日ポーランド南東部メディアカで（三木幸治撮影）

を作って難民らの受け入れを拒否。「反移民」を主張する右派政党も台頭し、難民問題をめぐってEU加盟国や市民の間でも分断が生じた。だが、今回はウクライナへの連帯が示された形だ。

なぜ前回と違うのか。理由として、ウクライナ人が欧州人であり、ほとんどがキリスト教徒のため、「同胞意識」が働いていることや、ロシアの侵攻が欧州の安全保障への挑戦と捉えられていることが挙げられる。

国境沿いにあるポーランドの街では、大勢のボランティアが避難民を支援する姿が見られた。炊き出しをする人、無料で大都市までの交通手段を提供する人。電話会社は、

避難民がウクライナの家族と連絡が取れるように無料のSIMカードを提供し、多くの市民が部屋の提供を申し出た。一時避難所には、寄付された子ども用の衣類が山積みになっている。

一五年とは一八〇度異なるこの光景を「ダブルスタンダード（二重基準）」と批判する声もある。ブルガリアのペトコフ首相は二月下旬、「今回はこれまで見慣れていた難民とは違い、ヨーロッパ人だ。知的で教養がある」と述べ、「人種差別的だ」と批判を浴びた。

欧州諸国に今後求められるのは、避難民に対する平等で一貫した政策だろう。例えば、さらに大勢の避難民が押し寄せた場合、今までと同じ待遇で受け入れられるのだろうか。実際、モルドバは既に「これ以上避難民を受け入れられない」として国際社会に援助を求めている。国境近くのポーランドの自治体からも悲鳴が上がり始めた。

欧州諸国は一五～一六年、大勢の難民らが流入した後、入国規制を実施した。今回は、後から国外に脱出する避難民を冷遇することがあつてはならない。戦争が起きた場合、資金に余裕がある人から避難し、貧しい人は避難が遅れる傾向にあるからだ。EUと各国は長期的な視点に立って、避難民対策を検討する必要があるだろう。●